

課題名：障害児と保護者によるお弁当宅配を契機とした地域見守り体制の構築
 —民間企業による地域共生社会づくりの一環として—

研究代表者：社会福祉学部 講師 瀧井美緒

課題提案者：有限会社まごのて

研究メンバー：齋藤昭彦・佐藤匡仁（社会福祉学部）
 久保忍・野崎玲華（有限会社まごのて）

研究協力者：小川晃子（岩手県立大学名誉教授）

技術キーワード：地域共生社会づくり、地域活性化

▼研究の概要（背景・目標）

有限会社まごのてが運営しているサービスを通して、児童・保護者・高齢者が相互に支え合うつながりづくりを促進していく一環となるよう、保護者や高齢者のニーズ・ニーズ把握をし、継続的な関係構築につなげていき、地域共生社会づくりへの今後の活用成果につなげていくことが目的とした。

▼研究の内容（方法・経過）

1. アンケート調査：まごのての保護者とまごのてに居住する高齢者
 （令和3年2月～3月に実施）

保護者に対しては、まごのてにおける交流経験、高齢者等とのふれあいが子どもの成長に影響すると考えるか、配食への意向などについて調査を行った。

高齢者に対しては、まごのてにおける交流経験、子どもとのふれあいにおける意識等について調査を行った。

2. ヒアリング調査：アンケート調査に回答した保護者のうち、ヒアリングに応じることを許諾し連絡先を記入してくださった保護者2名。
 （令和3年3月に実施）

高齢者見守り、アクティブシニアに支援してほしいこと、まごのてに支援してほしいことについてヒアリングを行った。

▼研究の成果（結論・考察）

まごのてが提供している交流イベントには、児童の76.2%、高齢者の70.0%は参加経験をもっていた。しかし、ふだんの生活の中での交流経験をもつものは、児童は28.6%、高齢者は30.0%にとどまっていた。高齢者等と子どもがふれあうことへの保護者の評価は高く、71.4%が「とても」成長に役にたつと回答していた。また、入居している高齢者等は身内の児童とふれあう機会をもつものは極めて少数であり、55.0%はまごのての児童とふれあいたいと回答していた。高齢者側からは季節のイベントだけではなく、外出機会を共にする案が、保護者側からは高齢者の伝統料理づくりや昔の遊びを教えてもらうなどの体験を共にしたいとの意見があった。

結果1 地域の高齢者等と子どもがふれあうことへの評価

選択肢	件数	%
1. とても役にたつと思う	15	71.4
2. どちらかといえば役にたつと思う	6	28.6
3. どちらかといえば役にたたない	0	0.0
4. 全く役にたたない	0	0.0
無回答	0	0.0
合計	21	100.0

結果2 まごのての子どもとふれあいたいか

選択肢	件数	%
1. はい	11	55.0
2. いいえ	4	20.0
無回答	5	25.0
合計	20	100.0

▼おわりに（まとめ・今後の展開）

1. 本研究において、保護者と高齢者ともに交流に対する評価やニーズが高いことが示唆された。さらに、保護者からは、アクティブシニアに対する子育てサポートのニーズがあることが明らかとなった。今後はこれらの視点からのマッチングを行うことが有益であると考えられる。
2. さらに、今後の展開として、新型コロナウイルスの影響により、本年度実施がかなわなかった社会実験について、本研究の結果を基に情勢を鑑み実施していく必要がある。
3. 本研究の実施にあたり、ご協力いただきました関係者の皆さまに改めて深くお礼を申し上げます。